

地域医療の岡部一家

幕末の筑紫野地域の医療は、それまでの漢方と長崎を窓口にして流入した蘭方（洋医）とが混在していました。しかし、まだ貧しい農村では十分な医療に恵まれていませんでした。地域医療の資料は決して多くはありませんが、旧御笠村で、医師の活躍を伝える資料が、少しずつ掘り出されています。

大石村の開業医岡部家が、明治維新の立役者とされる三条実美卿ら“五卿”の日記に登場しています。三条卿は1865年（慶応元）2月、太宰府入りした後、6月3日、近郊に遊んだ途中、落馬によって負傷しました。この時、武蔵温泉で治療にたずさわったのが福岡藩医の岡部養真です。また、1867年（慶応3）正月5日の記録（三条西季知、東久世通禮卿著）に「三条卿が内山（旧太宰府村）へ薩摩藩士たちの発砲見物（射撃訓練か、狩猟見物か）に出掛け、帰る途中で大石村の医師岡部忠徳宅に立ち寄った。しばらく憩いの時を過ごして、夕方、寄宿先の太宰府に帰った」とあります。この忠徳が医師養真の本名です。同家には三条実美卿の一首が保存されています。

「いかにして つくしの海によるなみの



▲岡部養岩の墓碑



▲大石の岡部家

ちへのひとへも 君にこたへむ」。

武蔵温泉での手厚い診療に対する謝礼として贈られた和歌でしょう。

同家の墓地には「養岩宗麟居士」と雄渾な文字で刻まれた高さ3m余の石碑が建っています。養岩は養真の父親ですが、その生没年などは不明です。藩医養真は、1874年（明治7）に死去しています。

孫の養麟（信太郎）は、福岡県立福岡医学
校を明治20年に卒業、帰郷して39歳で当主と
なっています。その子養逸は戦前、福岡市で
開業、子信彦、信郎はいずれも医師となっ
ています。江戸時代末期から明治、大正、昭和、
平成の200余年も続いた医療一家は珍し
いでしょう。

もう一人が旧阿志岐村宮崎の安武大正です。
旦那寺である宮崎山圓徳寺の記録によると、
明治38年、61歳で死去しています。この追悼
のため地元有志が墓碑建立を計画、募金運
動を進め、同45年3月に追弔会を催してい
ます。この時に墓碑が建立されたよう
です。「貧しい人からは薬代や診療費を
とらず、村人たちが感謝の墓碑を贈
った」と別の記録に残ってい

ます。そうした功績をたたえるか
のように、墓碑名は太宰府の画家・吉
嗣拝山が筆をとっています。この安武
大正については、1814年（文化11）の
旧御笠郡の医師名簿が『筑紫医師会70
周年史』に収められており、同名が記
載されているので、2代続いた医師一
家とも考えられます。

明治から大正期にかけては、農村
には医師がいませんでしたので、“村医
制度”がとられていました。旧二日市
村の齊藤秋庵、旧原田村の児玉伝男、
旧山家村の平嶋鵬太郎、旧塔原村の
権藤俊哲、旧石崎村の杉清見、旧下
見村の大城谷治雄などが地域医療に
活躍した医師として知られています。



▲昭和10年の五卿追慕祭で描かれた書画
（大石・岡部家）

